

# SDGs 学習の つくりかた

開発教育実践ハンドブックⅡ

## 実践事例編

### 社会教育・生涯学習

田中治彦

(上智大学名誉教授／開発教育協会理事)

#### 1. 社会教育・生涯学習における SDGs 学習

社会教育は、学校教育・家庭教育と並ぶ教育分野で、生まれてから高齢までをカバーする幅広い教育分野である。また、生涯学習は「いつでも、どこでも、誰でも」学べるような教育システムづくりのことであり、市町村などの公的機関のみならず、大学や民間団体によっても提供されている。ここでは、上智大学の公開講座「SDGs を生かす」、青少年団体 YMCA による地球市民育成プロジェクト、岡山市の公民館活動による ESD（持続可能な開発のための教育）の 3 つの事例を紹介する。SDGs の目標 4 ターゲット 7 に、2030 年まで各国で ESD を推進すべきことがうたわれている。

#### 2. 上智大学コミュニティ・カレッジでの SDGs 学習

上智大学では 2019 年度まで一般の社会人を対象とした公開講座を提供してきた。同大学は東京の都心という地の利もあって、夜間の講座に多くの社会人が参加してきた。2019 年度には SDGs に関する講義が春学期と秋学期に開講された。秋学期の講義内容は表 1 のとおりである。

この講義の目的は、SDGs を理解するに当って、17 目標を解説するのではなく、その理念に立ち返って理解することで SDGs の本質に迫ることである。SDGs を「豊かさ」「貧困」「公正」「共生」「平和」「循環」「居場所」の 7 つのキーワードで読み解くことをめざしている。また、最終的には SDGs を「自分事」として捉えられるように、講義形式だけでなく参加体験型のワークショップを取り入れた講義となっている。テキストは、開発教育協会の関係者による著書『グローバル時代の「開発」を考える』（西あい・湯本浩之編、明石書店、2018 年）が使用された。

10 回の講義の内容は表 1 のとおりである。最初の 2 回でワークショップも含めて SDGs について俯瞰的に理解する。最初の段階では、自己紹介や問題意識の共有に多くの時間を割いている。その効果があって、以後のディスカッションに参加者は積極的に参加していた。

第 3 回から 9 回は、7 つのキーワードについての講義と討議（ないしワークショップ）が行なわれる。ここで大切なことは、SDGs の 17 の目標をそのまま

表 1 2019 年度秋学期・上智大学コミュニティ・カレッジ「SDGs を生かすー7つのキーワードで読み解く」のカリキュラム

回	開講日	内容
1	10月10日	SDGs とは何か？
2	10月17日	ワークショップ SDGs
3	10月24日	豊かさ
4	10月31日	貧困・格差
5	11月7日	公正
6	11月14日	共生
7	11月21日	平和・難民
8	11月28日	循環・環境
9	12月5日	居場所・参加
10	12月12日	SDGs のキーワード

※講師：田中治彦（上智大学教授）

日時：2019 年 10 月 10 日～12 月 12 日、19:00～20:30

受講料：27000 円、受講生：20 名

解説するのではなく、その裏にある背景や理念について理解するように構成されていることである。

最後の回では、7つのキーワードについて再度確認するとともに、参加者各自の関心に従って、SDGsを今後どのように生かしていくかを話し合う。20名の参加者は、高校生から定年後の方まで幅広く、各自の社会経験を分かち合うことがお互いの刺激になっている。講座終了後も参加者が情報交換したり、原稿の依頼をするというような成果が現れている。

### 3. YMCA 同盟主催「地球市民育成プロジェクト」

YMCA は 1844 年にイギリスで誕生したキリスト教理念を持つ社会教育団体である。日本では、1880 年に東京 YMCA が設立されて以来、語学教育やキャンプ・野外教育、スポーツ事業や国際交流などの幅広い社会教育事業の他、保育や障がい児教育、職業教育や各種施設運営を含め全国的に事業を拡げ現在に至っている。また、開発教育協会が 1982 年に発足した当初、10 年以上にわたって事務局を担っていた。

YMCA は青少年指導の基本的な技法であるグループワーク（小集団指導）を日本に導入した団体でもある。しかしながら、1980 年代には青少年の「集団活動離れ」という現象もあり、青少年活動自体が停滞する傾向があった。日本 YMCA 同盟では、新しい時代の青少年活動を考えるための委員会を設置し、2008 年に「居場所づくり」と「グローバル市民育成」という二つの柱が提案された。すでに YMCA の世界組織レベルでは「グローバル市民」の育成が優先目標となっていたこともあり、日本 YMCA 同盟ではアジア・太平洋地域の YMCA と協力して「地球市民育成プロジェクト（以下 GCP）」を 2009 年より開始することとした。本プロジェクトの企画と運営には開発教育協会の理事・事務局数名が関わった。

GCP のプログラムは年間を通して行なわれる（表 2）。主に 3 段階に分かれている。第 1 段階は、参加者の募集とレポート課題への取り組みである（6-7 月）。GCP の応募対象は、趣旨に賛同し、地域に根差した活動に積極的に取り組むことを希望する 18~30 歳で、YMCA で活動経験があり（または関心がある）者である。夏期合宿は英語で行なわれるため一応の目安として TOEIC550 点以上が求められる。レポートは、貧困、環境、平和、多文化共生などのグローバル課題からひとつを選び、課題図書を読んで 3000 字程度の文章を作成することが求められる。

表 2 地球市民プロジェクト年間スケジュール

6 月	参加者募集・選考	アジア各国、各都市の YMCA、全国の大学からの参加者（研修生）決定
7 月	レポート課題の取り組み/提出 オリエンテーション	参考図書や文献を読み、芽生えた問題意識や自分の考えをレポートにまとめる。 1 年間のプロジェクトと夏期研修準備、研修生顔合わせを実施。
8 月	夏期研修	海外からの研修生とともに、地球規模課題を学ぶワークショップやフィールドワークからお互いの学びや気づきを共有する。夏期研修後、それぞれの所属や地域で行う行動のアクションプランを作る。
9 月	アクションプランに チャレンジ	夏期研修で作るアクションプランにそって、各自で実際にアクションを起こして活動し、知見やネットワークを広げる。活動期間は 9 月～翌年 1 月

11月	中間ふりかえり	夏期研修後の活動報告、プロジェクトのまとめにむけて振り返りのレポートを作成、提出する。
12月	フォローアップ ミーティング	リソースパーソン、チューター、スタッフからアクションプランの進め方のアドバイスを受ける。関東と関西の2か所で実施。
2月	最終レポート提出	アクションプランの実施報告、1年間の振り返り、プロジェクト終了後の展望についてまとめ、レポートを提出。
3月	報告会・認証式	アクションプランの活動報告および、地球市民認証状の授与。

出典：『SDGs カリキュラムの創造』177頁

第2段階は、夏期の国際合宿である（8月）。日本からの約40名の参加者に加えて、韓国、中国、香港、フィリピンなどのYMCAから派遣された合計約40名の参加者ととも表3のようなプログラムで1週間かけて行なわれる。必ずしも英語力が高い参加者のみではないので、「100人村ワークショップ」など参加体験型のプログラムや、フィールドワークが行なわれる。フィールドワークでは、テーマに合わせてハンセン病患者のための病院、横浜の多文化保育園、川崎のコリアン・タウン、外国人労働者が働く農園、などを訪問する。夏期研究の最終目的は、後半のプログラムに向けて、各自が行動計画を立てることである。一週間の合宿を経ると、最初は英語の表現が難しかった参加者も、行動計画を英語で説明できるようになる。

第3段階は、参加者が地元に戻って、各YMCAや大学で夏期合宿で立てた行動計画を実施することである（9月～2月）。地元で行動した結果を最終的にレポートで提出する。夏期合宿で立てた行動計画がそのまま実施できる参加者はむしろ少数である。というのは、地元に戻ると一人でその実現に向けて行動しなければならないからである。しかしながら、彼らを送り出した地元のYMCAや大学では、夏期合宿をきっかけに参加青年が大きく成長した事例が多数報告されていて、毎年のように参加者を送ってくるYMCAもある。

このプロジェクトは、YMCAがもっている特徴である、グループワーク、地域活動、国際性の3点を組み合わせた優れたESDプログラムであると言えることができる。

表3 夏期研修の内容・スケジュール(2018年度実施)

	1日目	2日目	3日目	4日目
午前		<ul style="list-style-type: none"> <li>・オープニングセレモニー</li> <li>・ホームグループシェアリング</li> </ul>	フィールドワーク <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会福祉法人青丘ふれあい館、ほっとスペースまな、在日大韓キリスト教会川崎教会</li> <li>・寿地区センター</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝のつどい</li> <li>・フィールドワーク振り返り</li> <li>・メディアリテラシー</li> </ul>
午後	国内研修生 オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップ1 「世界がもし100人の村だったら」</li> <li>・フィールドワークオリ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループリーダーミーティング</li> </ul>	ワークショップ2 「パーム油の話～地球にやさしいってなんだろう？～」

		エンターション		・グループアクティビティ
夜	・海外研修生到着 ・グループリーダーミーティング	・ウエルカムパーティー ・グループリーダーミーティング		国内研修生振り返り
	5日目	6日目	7日目	
午前	・朝のつどい ・シェアリング マイスターリー ・アクションプランオリエンテーション	・朝のつどい ・アクションプラン作成/発表準備	チェックアウト 出発/解散	
午後	・ネイチャープログラム ・フリータイム	・アクションプラン発表会 ・クロージングセレモニー		
夜	・フリータイム ・グループリーダーミーティング	・カルチャーナイト		

出典：『SDGs カリキュラムの創造』179 頁

#### 4. 岡山市立京山公民館における ESD の実践

岡山市は 2005 年から ESD の推進を政策化し、国連大学から RCE（持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点）の認定を受けて「岡山 ESD 推進協議会」を組織して ESD の推進に力を入れてきた。その際、中学校区に 1 館が整備され全館に専門職の社会教育主事が配置されている公民館を、地域での ESD 推進拠点として位置づけて ESD を展開することになった。

京山公民館がある地区は岡山市の中心市街地より少し北側に位置している。西北には半田山や京山を有し、東に旭川が流れ、市の中心部でありながらも環境にも恵まれている。また、弥生時代の津島遺跡や古墳、城址などの歴史的に貴重な文化資産も多い。学区内には岡山大学など 3 大学、3 高校、中学校 1 校に市立小学校 2 校、私立小学校 1 校を数え、さらに県の生涯学習センターもあるという、市内随一の文教地区でもある。

京山地区の ESD 実践は、2003 年の子どもたちを中心とした「子どもの水辺点検プロジェクト」からスタートしている。中学生をリーダーとして、小中学生を中心に子どもの目線を重視しながら、子どもから大人までが一緒になって地域を流れる用水の生き物や水質、大気等の調査を行い、結果を地域全体で共有し、地域の水辺の環境保全に取り組むというものである。この取り組みを継続的なものとしていくために、小中学校長をはじめ、NPO や地域団体の代表、公民館長等が集まって協議し、2004 年から「岡山 KEEP（京山地区 ESD 環境プロジェクト）」がスタート。2005 年には「京山地区 ESD フェスティバル」が取組まれている。この ESD フェスティバルの実行委員会が、2006 年に大学や高校、地域団体や公民館を拠点に活躍する諸団体もつなぐ形の ESD 推進協議会へと発展する（図 1）。

図1 岡山市京山地区 ESD 推進協議会の組織



このような中学校区の ESD 推進体制づくりとともに、ESD の実践も次のように多様に展開されていく。

- ① 子どもたちを中心に地域の古老に話を聞いたり、様々な方に集ってもらった井戸端会議で話し合ったりしながら、地域を見直し地域の歴史や現在の状況、未来へ残す財産を確かめ、京山いいところマップ等に整理。
- ② 「ムービー京山」という組織を創り ESD 映画作りを進め、2007 年に「The story of Kyoyama (京山物語)」、2008 年に第 2 弾「地域を育んだ用水」を制作。この過程で、地域の「水神際」が復活している。

- ③ 若者たちによる「劇団公民館☆京山」が 2009 年に発足し、ESD ミュージカル「かわのこい」を制作。以来、シリーズで作品を制作して ESD フェスティバル等で上演し、ESD の普及啓発に貢献している。
- ④ 「京山学区を知ろう！」講座や「うわさの ESD まるわかり！講座」等の ESD 講座を実施し、ESD 検定を行って「ESD フェロー (ESD 推進者)」認定証を発行。ESD の参加者を増やす取組みを展開してきた。
- ⑤ 多文化共生プロジェクトとして「フレンドリー京山」が活動を展開。年間を通した「地球めぐり」という講座的交流イベントを行って外国人との交流を楽しみながら、子育て中の外国人のサポートなども行っている。外国語で地域のお医者さんマップを発行したり、ESD フェスティバルでは毎回ワールドカフェ等の企画で交流の場を作ったりしている。
- ⑥ 誰もが安心してらせる住みよいまちづくりをめざして「地域の絆プロジェクト」を立ち上げ、子育てや防災、高齢者の問題などを話し合いの中から課題化して取組を進めている。独自の「地域の絆だより」も発行。「京山みんなのカフェ (ESD カフェ)」や「子育てトーク」に取組み、最近では外国人留学生の声から、自転車の安全問題に取組み、「やさしく走ろう京山」運動を展開。独自の自転車用啓発プレート (荷台や前かごに取り付けるもの) を製作・配布し、街頭での交通マナーの指導啓発活動も行っている。
- ⑦ ESD で学んだことをもとに、中学生たちが「市長と語る会」で提案し、ESD による市民提案協働事業として、産学官民の協力で地域の用水と道路を一体的に整備し、地域主体で管理・運営、活用を行う「緑と水の道」を実現。このプロセス自体が ESD であり、この取組は ESD による「持続可能な開発」具体例として、岡山市の「景観まちづくり賞」、国土交通省の「手づくり郷土賞」を受賞した。

京山地区の ESD の取組の特徴は、これらの多様な取組がばらばらに展開されているのではなく、京山地区 ESD 推進協議会に結集した多様な団体や個人によって地域の未来像を描き、その実現のための課題を整理して目標を立てて計画的に展開されていることにある。毎年の ESD 推進協議会の総会で取組を評価し、その結果を元に次年度の計画を立てて活動が展開される。2017-2018 年版の総括シートの「地域づくり」の項目では、目指す地域像が次の 5 つに整理されている。

- ① 子どもも大人も共に学び合い、社会的課題に協働して取り組む地域
- ② 地域の絆を強め、伝統文化を伝承し、人と自然が共生する地域

- ③言葉や文化の壁を越えて、同じ地域に住む外国人と共生する地域
- ④障害者や高齢者も誰もが安心して暮らせる、安全で安心な住みよい地域
- ⑤学んだことを活かせる場をつくることで、学びから持続発展し続ける地域

こうした取り組みの中から、ESD の標語が生まれた。それは、「(E) えーものを (S) 子孫の (D) 代まで」である。のちに議員提案で成立した岡山市の「持続可能な開発のための教育の推進に関する条例」は、その愛称として「E (えーものを) S (子孫の) D (代まで) 条例」と呼ばれている。

京山公民館の実践は、公民館を拠点として学校、地域、行政、企業、外部の協力者を結びつけたすぐれた ESD の実践事例といえることができる。京山公民館では、SDGs 達成に貢献する ESD として、今後も活動を続けていく予定である。

## 参考文献

- 西あい・湯本浩之編 (2018)『グローバル時代の「開発」を考える』明石書店  
秋元みどり(2019)「YMCA における地球市民育成プロジェクト」田中・奈須・藤原 (編著)『SDGs カリキュラムの創造』学文社  
内田光俊(2019)「まちづくりと社会教育」田中・枝廣・久保田 (編著)『SDGs とまちづくり』学文社

**タイトル** 「SDGs 学習のつくりかた 実践事例編 社会教育・生涯学習」

**URL** : <http://www.dear.or.jp/event/6950/>

**発行日** 2021 年 5 月 18 日

**企画** SDGs と開発教育研究会

**執筆** 田中治彦 (上智大学名誉教授／開発教育協会理事)

**発行** NPO 法人開発教育協会 (DEAR)

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-17-41 富坂キリスト教センター2号館3階

Tel : 03-5844-3630 Fax : 03-3818-5940

E-mail : [main@dear.or.jp](mailto:main@dear.or.jp) URL : <http://www.dear.or.jp/>



本編の著作権は (特活) 開発教育協会に所属します。著作権法上の例外を除いて、教材の全部または一部を無断で複写・転載・引用・要約することは禁じます。